

当院における退院時に向けた入院時からの内服薬自己管理方法

隠岐広域連合立隠岐島前病院 嶋崎裕子、泉敏夫、家中ふみ代、佐藤優子、常盤比呂子、松浦幸子、白石裕子、白石吉彦

【目的】

退院後の服薬管理を想定して、入院中に自己管理を習慣づけ、さらに退院後の服薬コンプライアンスを確認する

【方法】実施期間 2012.03.01～2012.04.30

1. 入院時の持参薬の残数がバラバラの患者、入院時のアナムネなどから退院後服薬管理を自身で行う患者を看護師、薬剤師で抽出する。
2. 抽出した患者の理解度に合わせ、自己管理する薬の単位を1日、3日、7日にする。服薬習慣が身につけてきたら、日数単位を拡大する。
3. 退院後、訪問薬剤指導や訪問看護などで退院後の服薬コンプライアンスを確認する。

【結果】

対象患者は全入院患者数113名中15名。そのうち、退院後の服薬コンプライアンス状況確認ができたのが6名。残りの9名は入院中や知夫村や海士町在住で島が違い退院後フォローができていない。6名のうち5名は、入院中の服薬コンプライアンスが維持できていた。残りの1名は、入院時は一包化されており服薬管理はできていたが、退院後PTP包装となったため、服薬コンプライアンスは入院時より低下していた。

【結論】

退院後の服薬コンプライアンスを確認できたのは、15名中6名であった。6名中5名は入院中の服薬コンプライアンスが維持できていた。入院中は飲み忘れがあっても病院スタッフの声かけがある環境だが、在宅では患者自身が服用しなくてはならない。退院後のコンプライアンスが良好だったのは入院中に患者自身が服用している薬に意識が持てた事が大きい。患者に意識を持ってもらうために病室を訪ねる回数を増やし患者が薬に対してどんな事を思っているのか、興味があるのかを知ることが必要である。薬剤師だけが自己管理している患者に関わるのではなく、病棟看護師などの協力を得て自己管理状況やコンプライアンスを把握し、退院後は訪問看護師などの協力も得る事ができれば服薬状況を確認する頻度が増す。当院は、自己管理対象患者の抽出は看護師と行うので情報を共有できる事がよかった。また、一人の患者を入院時から退院後もフォローできる環境である。さらに様々な職種が患者を囲んでいるので、職種問わず一人の患者としっかり向き合える。このため患者との間に信頼関係が得られ、退院後も患者との深い関わりと服薬コンプライアンスを維持できたのではないかと考える。今後も引き続き退院後服薬管理を行いたい。